A. ノーヴ

ソ連経済史

石井規衛
奥田央 ほか 訳
村上範明

岩波書店

ソ連経済史
一九八二年五月二四日　第一刷発行©
定価四三〇〇円
訳者　石井規衛　奥田央　村上範明　ほか訳
発行者　緑川亨
〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
発行所　株式会社　岩波書店
電話 〇三-二六五-四一一一
振替 東京六-二六二四〇
印刷・法令印刷　製本・青木製本
落丁本・乱丁本はお取替いたします
Printed in Japan

序　文

ソヴェト体制がロシアの地に樹立されてすでに半世紀以上になる。その指導者たちが多くの頭の痛い問題に対処している間、西側の観察者たちの方は多くの書物や論文を書いてきた。もしそれらの端と端とを一列につなぎあわせると、それはかなりの遠方までつらなることであろう。それではなぜ、どうころんでも歴史家とはいえない筆者が無鉄砲にも屋上屋を架そうとするのだろうか。批評家によっては「ロシアに関する本はこれ以上沢山だ」というかもしれない。この主題でさらに本を著すことには若干の弁明が必要となる。

その弁明とは、二〇世紀ロシアの経済史に関する簡便な著作がない、ということである。もとよりこの分野には若干の学術的研究も存在する。E・H・カーの記念碑的歴史書には経済に関する多くの記述がある。しかしペリカン版の、ほんの一九一七年から二三年までの時期の経済的出来事を扱った巻でも優に四〇〇頁を越える。これは批判をおこなっているのではない。その本には余分な頁は存在していない。それでも全期間についてのより短い概説書の存在余地はあろう。ソヴェト権力初期に関してはドッブの労作が最も有益であり、故アレクサンダー・バイコフの仕事は戦争までを扱っている。各種の本の詳細については本書末尾の文献目録でみることができる。筆者はそれらを読んだり、再読したり、さらにたいへん数多くのソヴェトでの研究を、当時のものや現在のものも含めてであるが、読むことで裨益した。その引用は注で示されている。

それはともかく、読者諸賢は比較的簡潔な書物にもそれなりの利点があることが判るであろう。そこでは、細かい点を一つ一つ扱うような研究では必然的に看過されてしまうような全般的な流れを素描することがおそらく可能とな

るのである。

ここでひとつの問題が、必ず大きく立ちはだかってくる。すなわち、政治の相対的な重要性についてである。もとより本書は経済史である。しかしレーニンがかつて書いたように「政治は経済に優位を占めざるをえない。そう考えないのはマルクス主義のイロハを忘れることである」。この言葉は、経済の優位こそがマルクス主義のイロハであると考える者には驚きかもしれない。しかしこの言葉こそ、ソヴェトでは政治が経済関係を支配し、変化させてきたという命題を例証しているのである。ほかならぬレーニン自身の口からもこのように言われているということなのである。

政治が支配的であることは否定し難いほど重要な意味をもっている。にもかかわらず、このことを字義通り、あるいは表面的にのみ、理解してはいけない。これは政治家が経済を自在に動かすことができる、ということを意味するものではない。経済的争点が現実的でないというのでもない。政治家たちは、成功の度合はさまざまであったが、経済問題に対応し、経済的難局と闘ってきた。彼らは大半の時期を、経済生活の主要な側面の指導にあたっていたのであり、一日の大部分、彼らはソ連株式会社という巨大企業の重役会を構成しているようなものであった。換言すれば、政治家としての彼らの行動は、巨大な管理者としての機能と相互に浸透しあっていた。こうしてレーニンの言葉にもかかわらず、政治と経済との間に明確な区分をおこなうことはほとんど不可能である。

本書では経済に関する政策、決定、事件、機構および条件といったことに集中的に関心を払っているが、だからといって他の側面に強調点を置くと何か不当な点が生じるというつもりはいささかもない。通史を書くのであれば、たとえこの私が書いたとしても、重点の置き方はおのずから異なろう。この点が最も顕著であるのは一九四一年から四五年にかけての戦争に関する比較的短い章である。この偉大なドラマは多くの観点から最も注意深くみる必要がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しかし純粋に軍事的な側面が圧倒的な重要性を有している以上、経済史にあってはいささか疎略な扱いでもってすますとしても正当であろう。

日付はすべて現在の暦に従っている。つまり革命が起こったのは一九一七年一〇月二五日ではなくて一一月七日である。ロシア語文献からの引用は筆者自身が訳出したが、英語版からの引用はそのまま用いた。

草稿の段階でセルゲイ・ウチェチン博士とジェイコブ・ミラー氏とに読んでもらい、批判的に検討していただいた。不十分で大雑把な議論に対し、その難点を数多く指摘され、多くの誤り、遺漏に注意を払われたことに感謝する。R・W・デーヴィス教授は親切にも現在進行中の御仕事の草稿をみせて下さり、第四章を書くのに利用させてもらった。またモッシェ・レヴィン博士からはソヴェト農民に関する彼の情報の宝庫より寛大な貸与をうけた。若干の章は英国、米国のいろいろな大学で私が発表したセミナーの報告に基づいており、参加者からの批判的評言から得るところがあった。ロジャー・クラークは事実を調べ、図表を照合するのにたいへん骨を折ってくれた。もとより事実と解釈に関するすべての責任は私が負うものである。

最後にM・チャネイ夫人とE・ハンター嬢とは、次々と襲う、半分は判読不可能な草稿に不平も(あまり)いうことなく、印刷所へ廻せるような形にタイプしてくれた。このことに対し、記して感謝したい。

凡　例

一　本書は Alec Nove, *An Economic History of the USSR*(Penguin Books)の一九八〇年版(初版は一九六九年)の全訳である。ただし原書に付せられている簡単な用語解説は、訳文等に反映されているという判断に基づいて削除した。

一　第一三章は、訳者の要請を容れて原著者が新たに書き下したものであり、さらに他の諸章にも著者によって新しく挿入された諸節がふくまれている。第一三章については、著者が執筆したのが一九八〇年夏であることを、対象の性質上特別に断っておく。なお巻末の参考文献にも原著者による追加と変更がくわえられている。

一　〔　〕は訳者による挿入であり、原著者によるものは〔　——著者〕として区別されている。

一　訳文中、ロシア語の典拠からの引用文について見出されたかぎりでの誤りや脱落には断りなく修正をくわえた。また行論における決定・決議の日付の誤り、統計の数字の誤りなども論旨に影響をあたえないものについては断りなく訂正した。論旨に関わると判断したものは、訳注(＊で示して巻末に一括した)でふれられている。

一　『レーニン全集』(第四版)、『スターリン全集』は、大月書店版のものによって典拠を示した(訳文は必ずしも邦訳書通りではない)。『レーニン全集』第四版にふくまれていないものは、第五版(В. И. Ленин. *П. С. С.* と略記した)からのものである。

一　索引には適宜、追加と削除をおこなった。

AN ECONOMIC HISTORY OF THE U. S. S. R.

by Alec Nove

Copyright © Alec Nove, 1969
All rights reserved

First published by Penguin Books Ltd, Harmondsworth, Middlesex, England

Reprinted with revisions 1976

This Japanese edition is published in 1982 by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo, by arrangement with Penguin Books Ltd, London, through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

目　次

序　文
第一章　一九一三年におけるロシア帝国……一
第二章　戦争、革命、革命家たち……二四
第三章　戦時共産主義……四六
第四章　新経済政策……九三
第五章　大論争……一三五
第六章　ネップの終焉……一五六
第七章　ソ連の大躍進 (1)集団化……一八三
第八章　ソ連の大躍進 (2)工業・労働・財政……二一八
第九章　大躍進から戦争へ……二六三
第一〇章　大祖国戦争……三三
第一一章　復興と反動……三四七

第一二章　フルシチョフ時代……三九〇
第一三章　ブレジネフ　安定から静止へ……四四七
第一四章　結　び……四六四
補遺　成長率について……四七五
訳　注……四八七
訳者あとがき……四九一
参考文献
索　引

第一章　一九一三年におけるロシア帝国

工業の発達

戦争そして革命の波に呑み込まれる直前の数年間には、ロシア帝国は、工業化された西欧の主要列強には大きく遅れをとっていたとはいうものの、すでに無視しえないほどの発展水準に到達していた。したがって、共産主義者が引き継いだのは、経済が停滞しており、完全に未発展で文盲の人々からなる国であったとみなす見解は、誤解をまねくこと大であろう。それゆえわれわれは、ロシア帝国の発展の経過を概観し、その発展過程が一九一四年に中断されたときに、はたしてこの帝国が近代的な経済への道を順調に歩んでいたかどうかについて、少くとも何らかの示唆を得るべく考察することを最初の課題としなければならない。

ロシアは、一八五四年に、時代遅れの社会組織と時代遅れの武器をかかえて西欧の列強に立ち向かった。当時ロシアの社会は硬直した階層制度によってなお支配されており、農民の大半が地主や国家あるいは皇帝によって所有される農奴であった。工業は一八〇〇年以降衰退していた。一八〇〇年の時点では、ロシアの金属生産量はイギリスと等しかった。しかし一八五四年までにロシアは大きく遅れをとってしまった。重要な鉄道のうちで完成していたものといえば、聖ペテルブルグ〔現在のレニングラード〕からモスクワまでの路線ただ一つだけであり、これにくわえて聖ペ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

テルブルグからワルシャワまでの路線が建設中であったにすぎない。クリミアのロシア軍への供給は舗装されていない道を馬や荷車でおこなわなければならなかった。その軍隊にしてもそれは、事実上終身の軍役をつとめる農奴からなっており、その武器も装備も貧弱なものであった。海軍の艦隊は蒸気船を一隻も備えておらず、それが成しうることといえば、わずかに敵のセヴァストーポリへの入港を阻止するために沈められることばかりであった。クリミアでの軍事的敗北はツァーリにとっても、またロシアの社会にとっても大きな衝撃であった。軍事強国としてのロシア帝国は変わりゆく世界に追いついていくことができなかった。それは近代化されねばならなかった。これらすべてが農奴制の廃止を促進するうえで役立ったことは疑いない。しかし、一八六一年の解放令の中に、農民の移動および農民による企業経営にかんする諸制限の規定が存在することからもうかがわれるように、当初、政府は保守的で伝統的な見解に強く影響されたままであった。工業化の意識的推進が政策形成の主たる動因となっていく過程はゆっくりとしたものでしかなかった。しかし、クリミアでのにがい教訓を経て、鉄道建設の必要性ははっきりと理解された。そしてこの鉄道建設が一九世紀後半のロシア経済の発展に大きな活力を与えることになったのである。いずれにしても、農奴制の廃止から第一次世界大戦勃発までの五三年間に、急速な経済成長と大きな社会的変化があったことは疑いえない。そしてこの時期におけるロシアの成長を、同じ期間における他国の成長と、また共産主義者たちがその後なしとげた成長と比較するのはたしかに興味ぶかいことである。しかしこれは、とくに統計資料がしばしば混乱しており、欠陥が多いだけに、きわめて困難な課題である。革命以前には、手工業および小規模な作業場が依然として非常に重要であったにもかかわらず、系統的に整った数字については、大規模ないし中規模の工業にかんするものしか得られないことが多い。帝政期の統計や成長率を何らかの形で計算しなおしてみるという課題は、この研究の範囲を超えるものである。工業統計にかんする限りでは、ゴールドスミスのきわめて完璧な再構成(それはロシアのすぐれた経済

学者コンドラーチェフの計算した指数を引用し、かつ発展させたものである)が、使用されたウェイトに応じて異なる、数多くの指数系列を与えてくれる。ここでは簡便のために、彼が一九〇〇年の価格に「換算した」付加価値ウェイトを引用しよう(表I-1)[1]。一八八八年から一九一三年の期間についての指数は、ちょうど年約五パーセントの成長率を示している。これはかなり高いものであり、一人あたりで考えても、アメリカやドイツよりも高いものであった。しかし農業部門の成長率がはるかに低く、しかもロシアにおける雇用および国民所得のうちで農業の占める比率が大きかったということによって、全体としての成長はよりひかえめなものになっていた。ゴールドスミスのおこなった国民所得の概算によれば、ロシアの成長率はアメリカや日本よりはるかに低く、ドイツよりもやや低いが、イギリスあるいはフランスよりは高いものであった。しかしロシアの場合、人口の急速な増加をともなったために、一人あたりの成長率となるとさらにずっと低いものであった。ゴールドスミスの考察によれば、ロシアの一人あたり実質所得は、アメリカや日本と比較した場合、一九一三年よりも一八六〇年の方が相対的に高かった。すなわち、アメリカや日本の成長の方がロシアの成長よりも急速であった。さらに、ロシアの成長は、いくつかの年にはひじょうに急速であったが、極度に不均等であった。たとえば、一八九一年から一九〇〇年までの一〇年間に工業生産は二倍以上になり、とくに重工業部門において著しい発展がみられた。

表 I-1 鉱工業生産
(1900 年 = 100)

1860	13.9
1870	17.1
1880	28.2
1890	50.7
1891	53.4
1892	55.7
1893	63.3
1894	63.3
1895	70.4
1896	72.9
1897	77.8
1898	85.5
1899	95.3
1900	100.0
1901	103.1
1902	103.8
1903	106.5
1904	109.5
1905	98.2
1906	111.7
1907	116.9
1908	119.5
1909	122.5
1910	141.4
1911	149.7
1912	153.2
1913	163.6

これは、一八九一年に導入された保護関税の結果でもあれば、ひきつづく数年間に、大蔵大臣となったヴィッテ伯が意図的に推進した政策の結果でもあった。ロシアの銑鉄の生産量はこの一〇年間に、同じ期間にドイツの銑鉄生産量がわずかに一・六倍にしかならなかったのに対して、三倍にもなった。石油産出量もこの一〇年間にはアメリカと肩を並べ、一九〇〇年にはアメリカをわずかに上まわり、まさしく世界第一位であった。この同じ一〇年間に大きな鉄道ブームも起り、路線距離の総マイル数は七三・五パーセントもふえた。しかし一九〇〇年から一九〇五年、および一九〇七年から一九〇九年の時期にかけての二度にわたり、経済恐慌が起こって成長速度の減退をまねいた。この恐慌は、とくに鉄鋼業に影響を及ぼし、銑鉄の生産量が一九〇〇年の水準をこえるのはようやく一九一〇年になってからであった。その一九一〇年以降、戦争勃発までの間に工業生産は再び急増した。帝政の業績を誇張したりはしそうにもない、ソ連の最近のある教科書においても、次のような評価が与えられている。一八六〇年から一九一〇年までの期間に、工業生産量は世界全体では六倍、イギリスでは二・五倍、ドイツでは六倍、そしてロシアでは一〇・五倍に増大した[2]、と。

表 I-2　ロシアの工業生産，英米との比較

(1913 年)

	ロシア	アメリカ	イギリス
電力(10 億キロワット時)	2.0	25.5[i)]	4.7
石炭(100 万トン)	29.2	517.1	292.0
石油(100 万トン)	10.3	34.1	—
銑鉄(100 万トン)	4.2	31.5	10.4
粗鋼(100 万トン)	4.3	31.8	7.8
綿布(10 億平方メートル)	1.9	5.7[ii)]	7.4[i)]

出典：Промышленность СССР, 1964, стр. 112–116.
注：i)1912 年，ii)1914 年.

しかしロシア帝国の経済成長はそれでもなお非常に緩慢であり、ロシアは先進諸国に大きな遅れをとっていたという議論がソ連の歴史家たちによってなされている。ロシアの成長は、パーセント表示によれば競争国と比較して決して劣るものではなかったが、ロシアの豊かな天然資源と、ロシアと西欧およびアメリカとの間に存在した大きな懸隔

表 I-3　世界列強の相対的産業発展　(1860-1910)

	綿花(一人あたりキログラム)		銑鉄(一人あたりキログラム)		鉄道[i]		石炭(一人あたりキログラム)		蒸気動力(1000人あたり馬力)		順位	
	1860年	1910年	1860年	1910年	1860年	1910年	1860年	1910年	1860年	1910年[ii]	1860年	1910年
ドイツ	1.4	6.8	14	200	21	75	400	3190	5	110/130	6	4/5
ベルギー	2.9	9.4	69	250	30	102	1310	3270	21	150	2/3	3
スペイン	1.4	4.4	3	21	6	58	—	330	—	4	8	8
アメリカ	5.8	12.7	25	270	19	122	420	4580	25	150/180	2/3	1
フランス	2.7	6.0	25	100	18	87	390	1450	5	73	5	6
イタリア	0.2	5.4	2	8	6	38	—	270	—	14/46	9/10	9
日本	—	4.9	—	5	—	14	—	230	—	7/10	11	11
イギリス	15.1	19.8	130	210	44	69	2450	4040	24	220/240	1	2
ロシア	0.5	3.0	5	31	1	24	—	300	1	?/16	9/10	10
スウェーデン	1.5	3.6	47	110	3	76	90	910	—	55/150	7	7
スイス	5.3	6.3	—	—	28	88	—	—	—	85/190	4	4/5

i) 人口および面積あたりの総距離数. ii) 大きい数字は他の形態での動力を含む.
— 無視できるほど小さいかもしくは資料のないもの.
注: ほとんどの数字は数年間の平均をしめしている.

とを考えるならば、なお不十分であった。今日のソ連の資料があげている表I-2の数字は、現在のロシアの領土に属している地域を対象とし、ロシアの当時の生産量をアメリカ、イギリスと比較したものである。石油産業がその高い成長率を維持することができず、今世紀の初頭一〇年間においてまさに後退しているという点が興味深い。

列強の相対的な発展度をはかるという、最初の、しかも巧みな試みは、P・ベロッシュによっておこなわれた。[3] その計算結果は、ロシアが、そのかなり大きな成長にもかかわらず、先進諸国に追いつくという点では、さしたる前進を遂げていなかったという見解をつよく支持している。ベロッシュの計算は、綿花と石炭の消費量、銑鉄の生産量、鉄道網、動力供給量を組合わせたものに基づいている。ロシアについては、彼は主としてゴールドスミスの研究からのデータを使っている。数字はすべて一人あたりの量で示されている。著者ベロッシュはその数字の正確さを決して主張しないであろうが、一九世紀の統計の不十分さを考えると、この方法は賞賛に値するものである。この方法で計算されたロシアの工業の成果は表I-3に示されている。この表によると、ロシアはこの五〇年間に、スペインをすら追い越すことができず、それどころかイタリアに追い抜かれてしまっている。著者ベロッシュは次のように説明している。すなわち、「ここで研究したヨーロッパ諸国の中で、一九世紀の末以降最下位にあるのはロシアである」。

表I-4 国民所得

	1894年 (一人あたりルーブリ)	1913年 (一人あたりルーブリ)	成長率 (パーセント)
イギリス	273	463	70
フランス	233	355	52
イタリア	104	230	121
ドイツ	184	292	58
オーストリア=ハンガリー	127	227	79
ロシア(ヨーロッパ地域)	67	101	50

同様の結論がプロコポーヴィチの計算からも得られる(表I-4)。[4]

ロシアの技師であり、また経済学者であったグリネヴェッキー教授も同じ結論に到達した。金属製品工業における後進性を例としてあげて彼は次のように述べた。

これらの比較は、ロシアが戦前の経済成長において、力強い資本主義的発展をともなった、より若い諸国に追いつくことができず、それどころか、実際にはますます遅れをとりつつあったという事実を雄弁にものがたって

いる。この結論はわれわれの政治的、社会的な虚栄心からみれば非常にみじめなものである。しかし疑いえない事実としてそれを認めねばならない。(5)

このように、ロシアはヨーロッパ列強のなかで最も発展の遅れた国であった。しかしそれでもなお、ヨーロッパの強国の一つでもあった。そしてヨーロッパのなかで、オーストリア＝ハンガリーのように、部分的にしか発展を遂げていない国に対しては、軍事的に圧倒し、経済的に競争していくこともできた。しかしロシアの発展は、産業間においても地域間においても、著しく不均等であった。その近代工業は、最新型の西欧の機械を使用し、設備の整った大工場が増加していく顕著な傾向をともなっているという点で、たしかにきわめて近代的であった。これらの工場は主としてペテルブルグ、モスクワ、ロシア領ポーランド、ウクライナの諸地域にあった。冶金工業の主たる中心地はいまやドンバスの石炭を利用する南部にあった。これに対し、ウラルのかつての冶金工業の中心地は衰退しつつあった。そして国内の残る大部分の地域には手工業以外にはほとんど工業らしいものはなかった。バクーの石油を別にすると南部および東部地域はとりわけ未発達であった。

また、いくつかの産業については、その不釣合なまでに多くの部分が第一次大戦および内戦の後にロシアから失われた地域(バルト諸国ならびにポーランドおよびルーマニアの一部となった領域)に集中していた。表I-5がこれを示している。

この時期における小工業(作業場および職人工業)の相対的重要

表I-5 1912年における総生産価値
(100万ルーブリ)

	残留領地	遺失領地
全工業	6059	1384
羊毛	344	297
皮製品	76	44
紙	61	33
ジュートおよび麻袋	28	14
木材加工	163	53
化学品	223	64
綿織物	1389	364
金属製品	1137	258

出典：В. Мотылев. 《Проблемы экономики》, 1929, № 1, стр. 36.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com